

齋藤報恩会博物館から齋藤報恩会自然史博物館へ

齋藤報恩会自然史博物館 学芸部長 竹内 貞子

齋藤報恩会自然史博物館というのは、私立の博物館としても特異な名前の博物館です。その名の由来、そして現在の博物館がよってたつ基盤を理解していただくために、財団法人齋藤報恩会と博物館の歴史に重点をおいて紹介したいと思います。齋藤報恩会自然史博物館について語るとき、まず財団法人齋藤報恩会そのものについてふれる必要があります。この博物館は齋藤報恩会の附置施設として開かれているものだからです。というより一体のものといった方がいゝかも知れません。

1. 財団法人齋藤報恩会の事業

財団法人齋藤報恩会は、宮城県北部の桃生郡前谷地村（現在の河南町前谷地）の大地主齋藤善右衛門（現在の理事長の祖父）によって、1923年（大正12年）に設立されました。善右衛門は当時の日本で5指に入る大富豪でしたが、「人間に働いて得た財産はすべて神仏が人間にあずけたものであり、神仏に返すべきである。神仏に返すとい

うことは、社会の公益のために拠出することであり、これが神仏の恩に報いることになる」と考えました。そこで1921年（大正10年）に300万円という当時としては巨額の資金を提供して財団法人齋藤報恩会の設立を申請し、2年後に文部省主管に属する財団法人として正式に認可されました。

こゝに財団は学術研究事業、産業開発事業、社会福祉事業の三本立てで、東北地方特に仙台を中心に事業を開始しました。これらの事業の中で、学術研究事業のための費用としては、基本金の利子のうち約60%をあてることにしました。アメリカ、ペンシルバニア大学の教授であった畑井新喜司が1921年に帰国し、東北帝国大学（現在の東北大学）理学部生物学教室の教授になっていきましたが、財団が設立されると同時に招へいされ、財団の学術研究部長を兼任しました。

学術研究部長としての畑井新喜司のリーダーシップのもとに助成された豊

富な研究費に支えられて、当時日本が世界に誇る画期的な研究成果が続々と誕生しました。八木秀次ほかの「電気を利用する通信法の研究」、本多光太郎・青山新一の「低温の研究」、大久保準三・増本 量の「物質の磁性に関する研究」、熊谷岱蔵の「糖尿病研究」などなど。そのほか地質学、生物学、化学、人類学などの広い分野にわたって、おもに東北帝国大学の研究者に対して多額の研究費が配分されました。創立後まだ日の浅かった東北帝国大学では、多くの新進気鋭の研究者が長期間にわたって多額の研究費の助成をうけて研究に没頭できたという幸運に恵まれました。研究費の補助は自然科学以外の分野にも及びました。また、現在東北大学図書館に所蔵されているヴント文庫、スタイン文庫、ティテルマン文庫、カムデルゲ版西蔵大蔵経、狩野文庫の洋書分そのほかの貴重な図書の購入にも特別の寄付を行いました。

2. 斎藤報恩会博物館の誕生とその活動

このような中で、1933年（昭和8年）に主として東北地方に関する事項の学術的研究とともに一般研究者の利

用の便をはかること、一般市民に対する科学知識の普及をはかることを目的とした斎藤報恩会博物館が開館し、初代館長に畑井新喜司が就任しました。

斎藤報恩会はその設立以来会館の建設を計画し、毎年事業費の一部を積み立てていましたが、学芸研究部長の畑井新喜司はこの会館を博物館とすることを提案し、幾多の屈折を経て理事会、評議会の同意を得、1931年（昭和6年）より博物館建設が着手されたのです。

新しい博物館の理念と実際について、1995年に西田書店より出版された蝦名賢造著「畑井新喜司の生涯」から、少し長くなりますが次に引用したいと思います。第2次大戦までの報恩会博物館の活動がはっきりあらわれているからです。

新喜司は『創設の博物館のあり方』について、在来わが国で考えられ、あるいは社会通念として持たれていた博物館に対する認識とは全く異なった考えを抱いていた。当時動物担当の学芸員として勤務していた大淵真竜もこのことについて次のように述べている。

「先生は、当時博物館といえば、変

色した魚の瓶詰などを一室に陳列して、一般観覧に供する所ぐらいに考え、学校の標本室を一般に公開したような現状だったのに少なからず不満を抱かれ、日頃、博物館本来の性質を生かし、殊に研究室主義の博物館といわれなければ博物館の意味が徹底しない実状を遺憾に思われ、その実状を打破しなければおかぬと常々こぼしていられた。そこで、専ら研究を主とするといわなくとも、博物館自体が研究機関である博物館をつくって、そこで研究させようと思われた。その第一歩がこの斎藤報恩会博物館の誕生となって現れたのである。」

新喜司は昭和6年5月「博物館時報」創刊号開巻第一号において、東北六県下の館友に報恩会博物館の一般方針を述べている。すなわち、多年の懸案であった博物館もいよいよ建設となり、その仕事は一切学術研究総務部に委嘱されたこと、その目的は東北地方に関する事項を学術的に研究すると同時に、科学知識の普及と一般観覧に公開することであること、それには研究用または観覧用標本、図書、史料を蒐集することが第一の急務で、この仕事

をできるだけ短時間に進め、所要の材料を蒐集するにあるとし、次のように述べている。

- (1) 図書部では東北六県の文化発達に關する図書および史料の蒐集の必要、とりあえず、上に関する完全な目録の編纂。
- (2) 標本部では奥羽六県下に産する動物、植物、地質、鉱物、化石などを今後5ヵ年以内に八分通り蒐集、蒐集には各県下のその方面の学友諸氏の援助によって完成したい。
- (3) かくして蒐集されたものは広く各専門の学者の研究用に供すること、その研究奨励法については、近く積極的方法を設けたいこと。
- (4) 鑑賞用の材料としては東北における代表的標本のみならず、東北地方以外に産するものといえども教育的価値のあるものの陳列。更に一步を進めて、生物進化の道程または生物發育の順序を示すがごとき設備をも加えたい。

さらに、①博物館における研究業績は報恩会において出版、広く学界に配付。②博物館と同時に建設の講義室を利用し時々専門家による学術

講演会の開催、一般公開による文運の発展への協力。③材料蒐集者の功労記念のための博物館友の規定。④博物館時報の発行。このように述べ、広く関係者に協力を求めている。

博物館は工事総額299,000円を以て昭和6年8月起工、2年後の8年10月竣工した。(中略)

新喜司は博物館の創設の目標として、欧米の博物館におけるような科学知識の普及に務めるとともに、研究機関としても活動し、東北地方の自然界および文化関係の事項の学術的な究明を以て、内外にこの博物館を特色づけたいと、各種の計画を立て、それを実行に移した。(中略)

各部の働きもきわめて活発に行われた。まず図書部では東北関係図書目録の作成。また、東北全工品の展覧会を開いて東北地方の旧文化の紹介に努めている。

次に標本部では、①市内小学校児童の団体観覧の誘導、②市内および郡部の地理理科担任職員への学校教育の補助機関としての参加の機運の醸成に努めている。

さらに、東北地方自然物の専門的

採集に当って、学芸員自ら採集研究に当たると同時に、専門家に採集を依頼、昭和6年以降採集委員によって採集された標本の活用の計画化を図った。これらは「博物館研究報告」(Saito Ho-on Kai Museum Reseach Bulletin)として刊行された。これらの刊行物は、国内はもとより諸外国の主たる博物館、研究所にも頒布し、「いささか仙台に斎藤報恩会博物館在り」と、日本博物館のために気を吐いていったことは、新喜司の卓抜した指導によるものであった。

3. 第2次大戦後の博物館

1945年(昭和20年)7月、アメリカ空軍による仙台市への空襲で、斎藤報恩会博物館も直撃をうけました。その結果、展示中の標本類をはじめ植物標本のすべてと図書の大部分が失われてしまい、博物館は休館せざるを得なくなりました。幸い建物の被害は少なく、標本類には大きな被害はあったものの、とくに戦前野村七平、畑井小虎によって記載された貝類の模式標本をはじめとする地学関係の化石はそっくり無事

で、現在も研究のための貴重な資料になっています。

敗戦後は貨幣価値の暴落という経済の変化のため、報恩会の財政的基盤は大きな打撃を受け、財団としての事業はもちろん博物館活動もまた完全に停止してしまいました。また建物の主要部分はアメリカ占領軍によって接收され、アメリカCIE図書館として利用され「アメリカ文化センター」とよばれていました。残りのごく一部を報恩会が使用するといった状態が長く続きました。1953年（昭和28年）になってやっと、会館の一部に地学関係の資料を中心としたごく小規模の展示を行なって、博物館を開館しました。博物館活動はごく限られたものでしたが、報恩会としては財団法人斎藤報恩会の設立の趣旨に従って、小額ながら研究費の補助はずっと続けており、現在も続いています。また畑井小虎ほかの努力により英文の研究報告“Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletin” No.20が1950年に出版されました。以後現在までほぼ年に一回の割で出版されています。現在は“Saito Ho-on Kai Museum of Natural History

Research Bulletin”に名前が変わっていますが、戦前から営々として英文の研究報告を出版し続け、国内のみならず諸外国の博物館、研究所と文献交換を行なっていることは、私立の博物館としては特筆に値することでしょう。

1976年（昭和51年）11月、旧館を改築した新館内に博物館を再開館しました。「斎藤報恩会自然史博物館」と名称を改め、展示は東北地方の自然史の資料を中心としたものにしぼっています。

以上のように、斎藤報恩会の博物館は戦前から現在まで東北地方の学術研究と学術の普及のために活動を続けてきました。しかし、戦後は活動の基盤となる財政面の極端な弱体化によって、博物館活動はあまり活発には行われていません。現在、館長は専任ではなく、準専任の学芸員が1名、あとは東北大学、山形大学、岩手大学などの教官が兼任の学芸員・研究員が4名という体制で、それなりの活動に取り組んでいます。

4. 博物館の展示⁴

博物館の展示室は1階と2階で、と

もに常設展示室です。年に1度位巡回の特別展を行いますが、常設展示室を転用しています。1階は地学関係、2階は生物関係ですが、そのほかに1階に特別展示室があります。

地学展示室のテーマは「東北地方の過去と現在」ですが、ほかの地方の資料も取り入れています。入口を入るとずっと奥まで見通せ、中央にアメリカ、ユタ州産出のアロザウルス（全身骨格の複製）が口を開けています。まわりは、右側は東北地方の地形、鉱物、岩石とならび、奥にナウマンゾウの全身骨格（複製）をはじめ大型脊椎動物の骨格標本がならんでいます。左側のコーナーは「地史と生物の変遷」のタイトルで、古生代から第四紀までの東北地方を中心とした代表的な化石を展示しています。中心入口側に化石や鉱物のブロックや大型アンモナイトなど手を触れられるコーナーを設けています。

2階の生物展示室は私たちに比較的なじみの深い脊椎動物をとりあげ、「進化と適応」について展示しています。中央は主としてパネルと模型で脊椎動物の進化の歩みをたどっていきます。

最後の「消えゆく鳥たち」のコーナーで、今絶滅の危機にひんしているトキやアホウドリ、コウノトリ、ライチョウなどの剥製を展示しています。これらの標本はすべて第2次大戦前に集められたものです。

最後に特別展示室ですが、前述の財団法人斎藤報恩会の研究助成により、本多光太郎が低温研究に使用した装置や、八木秀次によって考案された送受信機などが展示してあります。

5. 利用案内

所在地：〒980 仙台市青葉区本町2-20-2

(ホテル仙台プラザ西隣り)

TEL 022-262-5506

FAX 022-262-5508

開館時間：9：30～16：30

休館日：毎週月曜日（月曜日が祝祭日の場合はその翌日）、年末年始

入館料：大人350円、大・高生200円、中・小生100円。（団体割引は10名以上で50円引き）



写真 1
斎藤報恩会自然史博物館正面

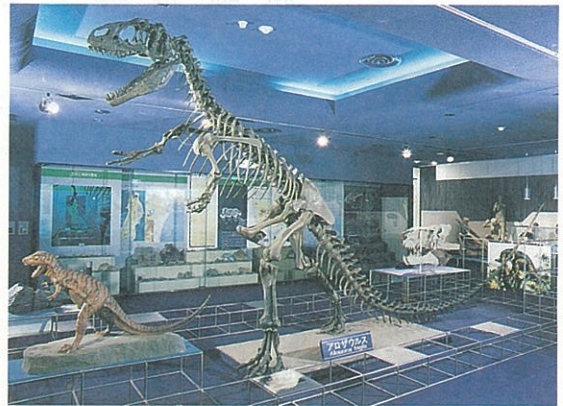


写真 2
アロザウルス全身骨格（複製）
アメリカ、ユタ州産・ジュラ紀



写真 3
カモノハシ亀の卵
中国、河南省産・前期白亜紀

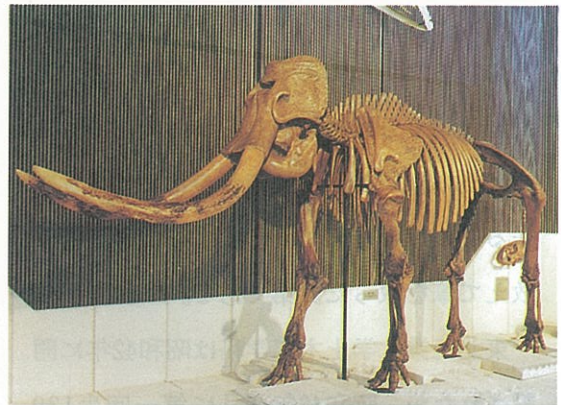


写真 4
ナウマンゾウ全身骨格（複製）
北海道、忠類村産・後期更新世



写真 5
絶滅の危機にさらされている鳥類

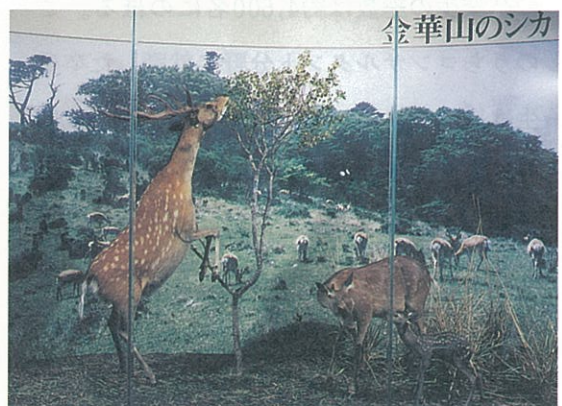


写真 6
金華山のニホンジカと自然のしくみ（ジオラマ）